

戦争さえなければ

下平 作江 (当時十歳)

油木の防空壕内で被爆。母、姉、兄爆死。戦災者連盟、被災地復元、援護法制定要求の運動に参加。一九八二年第二回SSDに出席以来、国内外で被爆の実相を語る。

防空壕のなかで

爆心地より八〇〇メートル油木町の防空壕のなかで被爆しました。当時国民学校の五年生で十歳でした。小学三年生になる妹と一歳六か月になる姉の長男と、いつも警戒警報、空襲警報が発令になると、そのたびに自宅から五〇〇メートル離れている油木町の大防空壕の中へ避難しました。昭和二十年八月一日の空襲から毎日のように空襲警報が発令されて、殆んど防空壕のなかですごしました。ひさしぶりにわが家に帰ったのは、八月八日の夕方でした。父は諫早の方へ軍属で召集されていて、朝は四時起床し夜は十時すぎでないと帰ってこないのです。父のほかは家族全員がそろって夕飯をたべる事が出来たのです。その翌日の朝、警戒警報のサイレンが鳴ったのですが、なんとなく母のそばにいたくて、わざとぐずぐずして家の中で遊んでいたのですが、「今日は危ないような気がするから、早く防空壕へゆきなさい。」と、母のせきたてる声に防空壕へ行きました。母は家に残って空襲にそなえて水をくんだり、雨戸をはずしたりしていました。私は防空頭巾をかぶり、いつものように八歳の妹と、一歳六か月の甥をつれて防空壕へ避難しました。これが母との最後の別れになるとは知る由もなく「行ってきます。」と手をふりながら母と別れたのが、朝の八時頃でした。

防空壕へつくと頭巾をはずして、しばらく休んでいると空襲警報も解除になったので、男の子たちは声をあげて防空壕の外へとび出しました。私は妹と甥といっしょに防空壕の中にいたのですが、その時が十一時二分だったのでしょう。ピカッと光った以外に私はなにもおぼえてません。防空壕の奥にいたので、熱線をうけることだけは免れたのですが、ピカッと光った瞬間に私の目の前は真っ暗くなり、意識を失ってしまいました。どの位たったのか時間的にわかりませんが、誰かにゆりおこされて気がついたのです。私がそこで見たものは、むごたらしいというしかいいようのない人間の姿でした。ガラスの破片が身体中にささっている人、壕の入口からあとからあとからと続いて入ってくるのです。それがみな誰か見分けもつかぬほどにやけただれ、裸同然で服はボロボロでした。

「母ちゃん母ちゃんたすけて」という声で、母の事が心配になり、「母ちゃん母ちゃん」と大声で泣き出してしまいました。時間はたっているのに家のものは、誰ひとり現われなかったのです。いったい壕の外で何が起きたのだろうか、子供ながらに何かひどい事がおきたのだなあと思いました。

防空壕のなかの空気はだんだん臭くなって、いきもつまるような気がしました。夕方になってから壕の入口で声がしたのです。「あっ父ちゃんだ」と思うと妹といっしょに、わんわんと声をあげて泣きました。「よかったよかった、こんなところには死んでしまう。外に出るんだ」壕から外へでてみたら、死骸の山と、壕のなかに入れずに、うめきながら横たわってるのです。やけどで皮膚がたれさがった人々でいっぱいでした。「死んだ人の上を越えて、ふまないように」と。……

母と姉の死

父は母と姉がいない事をすると、わが家の方へさがしにいきました。我家の付近は炎につつまれて一面火の海でした。母は黒こげの死体でみつけられました。姉は顔はふしぎなことに焼けないで、きれいな姿で残ってましたが、姉の死体を発見してからさらに二日後に母のやけどげた遺体を取り囲んで泣いたものです。母と姉の遺体は、焼跡にもえ残りの材木をつみ重ねて、その上でやきました。あちらでもこちらでも、人を焼く姿がみうけられました。

二人の兄の死

上の兄はフィリッピン沖で戦死、特攻隊員だったのです。戦争が終わったあとに、白木の箱で帰ってきたのでございます。次兄は医学生だったのですが、傷ひとつないのに、口からと歯ぐきの出血と、下痢便、それに黄色いものを吐いて、四日目の夕方亡くなりました。原爆でころされ、又戦地で戦死と、私達から一度に肉親を奪ってしまったのは、いったい何なのでしょう。戦争なのだ。戦争さえなければ、と考えれば考える程憎しみを覚えてくるのでした。…

昭和二十一年春、父と三人は一緒に

私達幼い三人は別々の家で育てられて、二十一年春に父といっしょに暮す事が出来るようになりました。たべるものがなく、山へいってはアカザとかノビルをとってきて、それをたべて生きてきました。無縁仏さんを集めて、生き残ったもので慰霊祭を行いました。

やけあとに、やっとすめる位の小屋をたてての生活でした。八歳だった妹も高校三年になりましたが、盲腸になり手術をしたのですが、傷口がふさがらな

いのです。被爆に伴う白血球減少のためではないかと、傷口がふさがらないので、そこからおう、においに悩んでいたのですね。十九歳の短い人生を、終わったのです。なやみになやんで鉄道自殺をしてしまったのです。そこまで悩んでいるとは知らず、姉として何も相談にのれずに、力になってあげることが出来なかった事が、悔まれます。

語り部として

私は十年前より被爆体験を語りはじめました。父が原爆遺族会の会長をしていたために、その影響もあったのでしょうか。あの思い出したくもない、つらい悲しい被爆の事を語りはじめたのは、爆死した人々に対する生き残ったものとしての義務として考えているからです。まだまだ被爆の実相を知らぬ人達がおられる事と今後も語り継いでいかないと、いけないと思います。一人の人が十口言うよりも、十人の人が各々一口いうことの方が、同じ十でもどれ程強いことか。平和を守るために、がんばりましょう。そしてこの悲惨な出来ごとを風化させないために、二十一世紀を緑の地球と平和な世代にするために。

一九八八年（昭和六十三年）